

な
か
っ
た

こ
と
に
は

で
き
な
い



黒川の女たち

監督 松原文枝 語り 大竹しのぶ

撮影：神谷 潤 金森 之雅 編集：東樹 大介 プロデューサー：江口 英明

製作：テレビ朝日 配給：太秦 2025/日本：99分/ドキュメンタリー

© 2025 太秦 文化庁文化芸術振興費助成金・日本映画製作支援事業・独立行政法人日本芸術文化振興会

kurokawa-onnatachi.jp

1945年 関東軍敗走の満洲で待ちうけた、黒川開拓団の壮絶な運命——
戦争と性暴力の事実、いま知るべきことがここに在る。



次に生まれるその時は、 平和の国に産まれたい

(「接待」を強いられた女性の聲)

高齢になった生存者の女性たちが、
その身に背負ったトラウマと

ステイグマから解放されるプロセスを、
このドキュメンタリーは描いた。

「黒川」はそれを象徴する名前となった。

「反省しない」日本は、黒川に学べるだろうか？

上野千鶴子

伝えなくてはならない。

自分たちの孫やひ孫が幸せであり続けるために、

過去をきちんと知り、

未来を考えると、しなくてははいけないと思います。

大竹しのぶ

記憶が歴史になる前に、未来へ遺す。 戦禍を生きた人びとの証言。

80年前の戦時下、国策のもと実施された満蒙開拓により、中国はるか満洲の地に渡った開拓団。日本の敗戦が色濃くなる中、突如としてソ連軍が満洲に侵攻した。守ってくれるはずの開東軍の姿もなく満蒙開拓団は過酷な状況に追い込まれ、集団自決を選択した開拓団もあれば、逃げ続けた末に息絶えた人も多かった。そんな中、岐阜県から渡った黒川開拓団の人々は生きて日本に帰るために、敵であるソ連軍に助けを求めた。しかしその見返りは、数えて18歳以上の女性たちによる接待だった。接待の意味すらわからないまま、女性たちは性の相手として差し出されたのだ。帰国後、女性たちを待っていたのは労いではなく、差別と偏見の目。口さがない誹謗中傷。同情から口を塞ぐ村の人々。込み上げる怒りと恐怖を抑え、身をひそめる女性たち。青春の時を過ごすはずだった行先は、多くの犠牲を出し今どこにも存在しない国。身も心も傷を負った女性たちの声はかき消され、この事実も長年伏せられてきた。だが、黒川の女性たちは手を携えた。したこと、されたこと、みてきたこと。幾重にも重なる加害の事実と、犠牲の史実を封印させないために――。

